フランス、アルザス地方におけるイスラーム空間の創出
―ストラスブール・大モスク建設を事例に―

The Creation of Islamic Spaces in Alsace (France) :
A Case Study of the Grand Mosque of Strasbourg

人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻 M2 佐藤香寿実

1．要約

（和文）

近年フランスでは、公共空間でのスカーフ着用やモスク不足による街頭での集団礼拝が世俗主義に抵触するとされ、政教分離原則ライシテと「聖俗不可分なイスラーム」との対立が、メディアや政治の場で盛んに取り上げられてきた。一方、フランス北東部のアルザス地方は、独仏によって所有を争われ、19 世紀以降四度も帰属が変化し、そのたびに同化（国民化）を強いられた歴史を持つ。その歴史ゆえ、例外的にライシテの法的基盤である政教分離法（1905 年制定）が適用されておらず、独自の地方法のもとで、他地域とは異なる政教関係が存在する。本研究は、このアルザス地方に着目し、ローカルレベルでイスラーム空間がどのように創られ、利用されているかを明らかにすることで、世俗主義と自由なイスラーム実践の共存可能性を探ることを目的とした。本報告は、特に、2012 年に市や公共団体からの援助を受けて建設されたストラスブール・大モスクの建設過程と利用状況を探るため、2014 年 8 月 30 日から 9 月 28 日までの約 1 か月間にわたって実施した現地調査の報告書である。参与観察とインタビューに基づく調査の成果として、ストラスブール市におけるイスラーム空間の多様性が浮き彫りになった他、ストラスブール・大モスクの建設過程において宗教間協力が促進される一方で諸アクター間の対立関係も存在していたこと、このモスクが新しいイスラームイメージの構築に貢献していることが明らかになった。

（英文）

In France, we have always seen in the media the growing conflict between the republic principle of ‘laïcité’ and Islam which is generally considered not to separate religions and politics. Wearing scarves and group prayers in public are said to be against the French secularism. On the other hand, the Alsace, the northeast of France, has been historically a conflict oriented area often changing sides from Germany to France and vice versa. For this reason, in Alsace, there is a special relation between religions and the State. It is made possible through the unique local law of Alsace, which is different from the national law on the separation of church and state applied to other regions since 1905. The purpose of my study is to search for the conditions of peaceful co-existence between secularism and the free Islamic practices by examining the creation of Islamic spaces on the local level in Alsace region. This is the report of the field survey conducted in the period from August 30th to September 28th 2014. It mainly aims to investigate the establishment and use of the

Grand Mosque which was constructed in 2012 in Strasbourg and which is financially supported by the Strasbourg town and the Alsace region. As a result of the fieldworks and the interviews, it was found that there were diverse forms of 'Islamic Spaces' created in Strasbourg, and that there were both interreligious cooperation and some conflicts during the establishment of the Grand Mosque, and also that this mosque contributed to the creation of the balanced image of Islam in Strasbourg.

2. 現地調査期間：2014 年 8 月 30 日～9 月 28 日

3. 調査背景

第二次大戦による人口減少と高度成長期の労働力不足から、フランスは旧植民地国を中心として大量のムスリム移民を受け入れてきた。石油危機後の 1974 年に新規移民受け入れ停止措置がとられるが、それまでに来た移民の多くは家族を呼び寄せて定住し、第二・第三世代へとイスラームが受け継がれていく。世俗主義社会にムスリムが「統合」されていく過程で様々な対立が生じるが、フランスのイスラームに関する議論はつねに国家原則ライシテ（laïcité）とともにあった。日本語で「非宗教性／脱宗教性」と訳されるこの原則は、王政と結びついたカトリックを公的領域から排除することで信教の自由を保障し、共和制を確立していくための歴史的な闘争とともに発展してきた（ボベロ、2009）。1905 年制定の「教会と国家の分離に関する法」（以下、1905 年法）によって立法化され、現行の憲法第一条にも「フランスは、不可分の非宗教的（laïque）、民主的かつ社会的な共和国である。」という形で記載される。ムスリムのスカーフ着用に関する論争に代表されるように、この共和国原則としてのライシテと「聖俗不可分なイスラーム」との対立が、メディアや政治の場で盛んに取り上げられる。しかし、1905 年当時ドイツ領だったアルザス地方では、例外的にライシテの法的基盤となる 1905 年法が適用されていない。代わりに独自の地方法のもとでコンコルダという政教協約（1801 年ナポレオンと教皇ピウス 7 世が締結）が残存しており、公認宗教であるカトリック、プロテスタントのルター派と改革派およびユダヤ教の聖職者には国家から俸給が支払われる他、公立の初等教育学校における宗教教育が必修となっている（Messner 他、2004）。イスラームは公認宗教には入っていないものの、他地域では起こりえない恩恵を受けることがある。一例として、他地域では 1905 年法によって国家や地方団体から特定の宗教組織への金銭的援助は禁止されているが、アルザス地域圏の首府であるストラスブール市に 2012 年に建設されたストラスブール・大モスク（Grande Mosquée de Strasbourg）には、建設資金として市や公共団体から助成金が拠出された。「フランスにおけるイスラームは、中心的な権威の不在によって、また定住人口の変遷に応じて、地域ごとに異なる歴史を持っている」（Godard &Taussig, 2007）との指摘がされる中、地域ごとの文脈でイスラームを捉え直すことが必要とされる。

4. 調査目的

アルザス地方というローカルなレベルでイスラーム空間がどのように創られているか分析することで､フランスのイスラームと世俗主義の関係性を再考することを目的とする。特に、ストラスブール・大モスクを研究事例とし、このモスクの建設を可能ならしめた要

因、建設過程における諸アクター間の対立・協調の存在、さらに完成したモスクの利用実態を明らかにする。

5. 調査方法

アルザス地域圏の首府であるストラスブール市を主な拠点とし、大学やモスクにおけるインタビュー調査と、現地研究機関における資料収集を行った。具体的な調査内容を以下に記す。

(1)現地の大学機関で隣接分野の専門家たちと面会し、研究に対する助言を得た。ストラスブール大学プロテスタント神学部の教授でイスラーム学が専門の Ralph Stehly 氏、同じくストラスブール大学の社会学部教授でアルザスの移民問題に詳しい Laurent Muller 氏、エクサンプロヴァンス大学の政治学部教授でフランスのイスラーム問題を専門とする Franck Frégosi 氏と面会した。

(2)ストラスブール・大モスクの建設に直接的／間接的に関わったムスリム 4 名と、建設のマネジメントを請け負った会社・SERS（Société d'Aménagement et d'Equipement de la Region de Strasbourg: ストラスブール地域整備開発会社）の担当者 1 名、建設資金援助を行ったアルザス評議会の参与 1 名と面会し、それぞれ 30 分～1 時間半の半構造化インタビューを実施した。

(3)金曜礼拝へ参加するなど、ストラスブール・大モスクの利用状況に関してフィールドワークを行った。そこで出会った非ムスリムの観光客 1 名に対する半構造化インタビュー、ムスリムの利用者 1 名に対する非構造化インタビューおよび 5 名のムスリムの利用者とのグループ・インタビューを行った（それぞれ 30 分～1 時間程度）。さらに別のムスリムの利用者 1 名に対し、メールによるアンケートを実施した。そのほか、参与観察中に得た語りも調査結果に含めてある。利用者に対するインタビューは統一した方法がとれず、時間も十分でなかった場合があることを注記しておく。

(4)ストラスブール市内の他の礼拝所や、ムスリム専用墓地などを訪問した。

(5)アルザス地方法研究所や国立図書館など、現地研究機関で関連資料の収集を行った。

6. 調査結果

(1)ストラスブール市におけるイスラーム空間

ストラスブール市におけるムスリム人口は、1998 年時点で住民全体の 10%程度と推定されており、イスラームはカトリック、プロテスタントに続き 3 番目の宗教となっている（Frégosi, 2001）。ムスリム人口の増加に伴い、ここ 30 年で「イスラーム空間」が市の景観にも現れてきている。本研究で扱う「イスラーム空間」とは、第一にモスクや礼拝所のことであり、ムスリムの宗教実践にかかせない場のことである。同様に、イスラームの規律を守るために存在するハラール食品店とムスリム用の墓地も、宗教実践には必要なイスラーム空間であるといえよう。しかし、実際には宗教的スペースと文化的スペースとの線引きは難しい。礼拝所にはカフェや教室など、宗教的というよりも文化的なスペースが併設されているケースも少なくない。ファッションは文化的なものであるものの、ムスリム・ファッション店などは、スカーフや女性の体の線を隠すような服が売られていることから、宗教と全く関係ないものとは決して断じえない。この観点から、必ずしも宗教実践と関わ

るとはいえないが、イスラームを想起させるような文化的な場をも含む、より包括的な概念としての「イスラーム空間」という語の有効性を考えたい。以下、調査で明らかになったストラスブール市内に見られる「イスラーム空間」の様子を記述していく。

①モスク、礼拝所

ストラスブール市のモスクに関しては、「中央のモスク」（Mosquée centrale）と「界隈のモスク」（Mosquée de quartiers）という二種類の表現が新聞などで見られる（Dernières Nouvelles d'Alsace, 1998）。「中央のモスク」とはストラスブール・大モスクのことで、いわゆる「モスク」の形をしたモスクのことである。「界隈のモスク」とは、もともとは礼拝目的でつくられたものではないスペースを利用した礼拝所のことで、「近隣の礼拝所」（lieux de culte de proximité）と表現する学者もいる（Frégosi,2001）。通常ムスリムが集って礼拝を行えば、それはモスクと呼ばれるのであるが、ここでは便宜的に、礼拝目的で建てられたものをモスク、礼拝以外の目的で建てられたスペースを使用しているものを礼拝所と呼ぶ。ここでは「界隈のモスク」のいくつかを紹介する。

まず、大きい礼拝所として有名なのは、Meinau 地区にあるアイユブ・スルタン・モスク（Mosquée d'Eyyub Sultan）である。この礼拝所はトルコ系の Milli Görüs というイスラーム団体の分派が管理しており、10,000 ㎡の工場を礼拝用に改築したものである。カフェやハラール専門店、教室などが備わっている。男性も女性も同じ礼拝室で祈るが、女性用スペースと男性用スペースの間には仕切りがある。施設内にはトルコ語の表示が多く見られた。

【写真 1】アイユブ・スルタン・モスクの外装

【写真 2】アイユブ・スルタン・モスク礼拝室内部

鉄道駅のそばには二つの礼拝所がある。ひとつはアル=イマン・モスクである。AMS（Association des Musulmans de France: フランスのムスリム連盟）というイスラーム団体が管理している。モスクの外壁にはびっしりと貼り紙が貼られており、すべてフランス語でイスラームの教えを書いたものや、イスラームを紹介するような内容である。工事中なので中には入ることができなかった。男性用の礼拝スペースと女性用の礼拝スペースは分かれており、事務所が１つと、教室が４つあるという。アラビア語、コーラン、モハメッドの生涯などについての授業を週一回、半日かけて行

【写真 3】「駅のモスク」入口

っている。もうひとつは「駅のモスク」と呼ばれる礼拝所で、女性用と男性用で礼拝室は分かれており、筆者は男性用スペースには入れなかった。モスクの内部はアラビア語の貼り紙が多く、フランス語の表示は少なかった。女性用の礼拝スペースには、絨毯の模様以外にはメッカの方角を指し示すものはなかった。

Meinau 地区にある集合住宅 Résidence Social Metzgerau では、多目的室を礼拝所として使用している。この礼拝所は Foyer de Meinau という名前で呼ばれている。多目的室のドアには、住人以外は使用できないという旨の貼り紙があった。60 代くらいのアルジェリア出身の男性利用者が案内してくれたが、女性用の礼拝スペースはなく、女性の利用者もいないと話してくれた。

【写真 4】Foyer de Meinau 礼拝室

【写真 5】集合住宅

Haute Pierre 地区では、現在新たなモスクの建設計画が進行中である。中学校と体育館がすぐ近くにある。案内してくれた 50～60 代の男性ムスリムいわく、完成すればストラスブールで初めてのミナレット（尖塔）付きのモスクになる。モスクはまだ完成しておらず、経済的な理由から建設を停止している。建設が終わるまでは、ムスリムたちは仮の礼拝所として、徒歩 5 分ほどの場所にある貸ビルの一室を使用している。

【写真 6】建設中の Haute Pierre モスク

②その他

ストラスブール市には、2012 年にムスリム専用の公共墓地がつくられた。イスラームの教えに則した埋葬がなされ、公共の集合墓地としてはフランスで最初の例である。アルザス以外の地域では、1905 年法によって宗教ごとの公的な墓地区画は禁止されており、アルザスの地方法が実現を可能にしている。また、敬虔なムスリムにとっては食べ物の問題も重要である。ストラスブールでは、他のフランスの都市と同様に、ハラール専門食品店も珍しくない。ハラール専門食品店ではない普通の大型スーパーにも、ハラールと表示のある食品が置いてある。ハラール取扱いの標示のあるエスニックレストランも多い。他のイスラーム空間として、ムスリム・ファッションの店を挙げることができる。様々な色・模

様のスカーフはもちろんのこと、露出の少ないワンピースやパーティー用のドレスなどが販売されており、ファッショナブルなムスリム女性客たちが多く利用していた。また、中心街の大型書店ではイスラームに関する書籍のコーナーが設けられており、これらの本の需要の高さが窺える。

【写真 7】ムスリム専用公共墓地

【写真 8】スーパーで販売されるハラール食品

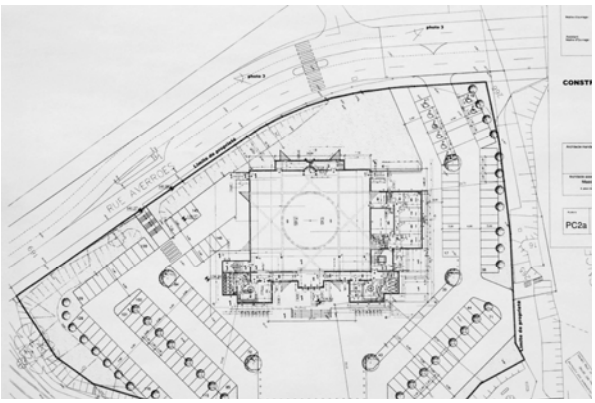
(2)ストラスブール・大モスク

今回、筆者が特に力点を置いて調査を行ったのが、「中央のモスク」と呼ばれるストラスブール・大モスク（Grande Mosquée de Strasbourg）である。以下ではストラスブール・大モスクに関して明らかになったことを詳述していく。

①ストラスブール・大モスクの立地

トラム停留所 Laiterie から徒歩 5 分程度、バス停 Lycée Pasteur の目の前に位置しており、道路橋である Hyritz 橋に隣接している。トラム、バス、自動車、徒歩でアクセスでき、交通の便は非常によい。中学校、高校、ウイルス研究所、市民病院、ストラスブール大学の医学部キャンパス、カヌー学校が立ち並ぶ一帯にある。また、モスクはイル川とローヌ・ライン運河の合流地点に位置しており、そこは自然公園の一角となっていて、のどかな雰囲気を醸している。川に面したモスクの沿道には、ジョギングやサイクリングをしている人が多い。南西の方角には、ローヌ・ライン運河をまたぐ形で TGV（高速鉄道）や TRF（地域圏急行輸送）の高架橋がかかっている。

【写真 9】当初計画されたモスクの模型



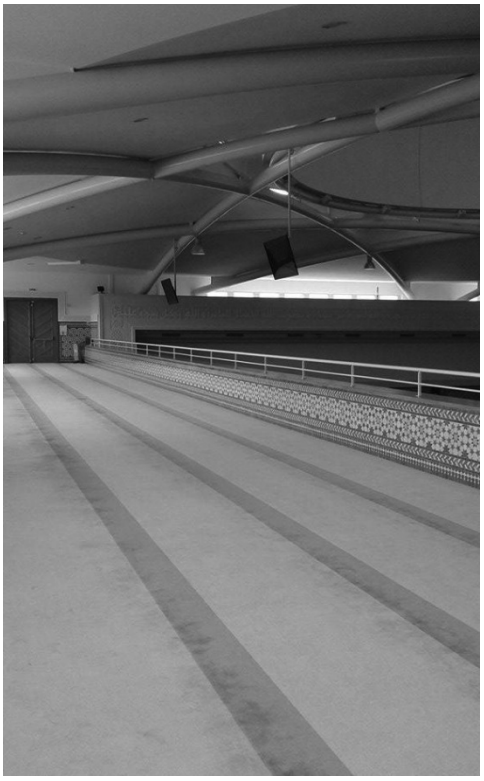
【図表 1】モスク平面図

②ストラスブール・大モスクの利用状況

モスクの入り口は男性用と女性用で分かれている。男性用入口には大きな扉が 2 枚ついており、扉の左右にはそれぞれアラビア語とフランス語で、モスクの完成を記念する石版がはめられている。男性用入口から入ってすぐ右手に靴箱とトイレ・沐浴場がある。1 階の男性用礼拝スペースは 1,000 ㎡で、1,200 人余りを収容できる。タイルで飾られたミフラーブ（メッカの方角を指す窪み）が一つ、その横にミンバル（説教壇）が設置されている。大きな丸天井には、採光のために小さな窓のようなものがついている。女性用の入り口の扉はひとつで、事務所と隣接している。女性用入り口から入って左手のドアを開けるとトイレと沐浴場がある。右手には、女性用の礼拝スペース（2 階）へ到達する階段とエレベーターが設置されている。2階の女性用礼拝スペースは220㎡で260名を収容できる。2 階のスペースにはテレビスクリーンが三つ設置されており、礼拝時には、1 階で説教を行うイマーム（導師）の顔が映し出される。

【写真 10】ストラスブール・大モスクの入口

【写真 11】男性用礼拝スペース（1 階）



【写真 12】女性用礼拝スペース（2 階）

礼拝に来る人数は日によってまちまちであるが、金曜以外の平日は、女性用のスペースでは 1 回の礼拝につき 10 人～20 人前後のムスリムを見かけた。礼拝の時間として定められていない時間帯にやってきて一人で礼拝をする利用者も多く、フレキシブルに利用されているため、一日の平均利用者数を割り出すことはできなかった。金曜日の大礼拝では、礼拝場が満杯になることも多く、またラマダン月などの祭りの時には、礼拝場の外の駐車場スペースまで信徒であふれかえることもあるそうだ。大礼拝時の説教は、まずイマームによってアラビア語で行われた後、ボランティアによってフランス語で通訳される。

筆者は、このモスクを利用するムスリム女性 7 名に対しインタビュー調査等を行った（協

力者の属性に関しては図表 2 を参照のこと)。インタビューでは、モスクを利用する頻度やこのモスクに来る理由、ムスリムとして生活していく上での困難などについて尋ねた。日常的な礼拝の場としてストラスブール・大モスクを選ぶ理由には、「バス停のすぐ近くで交通の便がいいから」(B 氏・C 氏)、「フランスで二番目に大きいモスクだから」(B 氏・D 氏)、「高校のすぐ近くだから」(D 氏)、「大学のキャンパスのすぐ近くだから」(G 氏)といった意見があがった。「すぐ近くに住んでいるから。別にどこのモスクでも構わない。」と言い去って行った女性利用者もいた。以前は利用していたが現在は利用していないという A 氏は「自分の住んでいるところから遠いからもう通っていない。今は大学キャンパスの近くのモスクによく行く。」と話してくれた。どのモスクに行くのか、ということに関しては、家や学校、職場からの近さ、生活圏内にあることも重要な指針となっていることがわかった。

モスクは観光スポットとしても利用されている。筆者も短い滞在の中で、ストラスブール在住の非ムスリム女性 2 名、トルコから来た観光客の女性 2 名、アメリカ人のツアー団体などに出くわした。信徒が内部を案内している様子も見られ、モスクがムスリムと非ムスリム、信徒と観光客との交流の場所になっていることが窺えた。モスクを訪れたストラスブール住民の女性(H 氏)の話では、「単に審美的な好奇心からここに来た。観光客が大聖堂に行くように、私もモスクに行ってみたかっただけ。宗教的な意味は全くない。モスクの中に入ったことがなかったから、どうなっているか知りたかった。」という。彼女はまた行きたいとも話しており、モスクに対してポジティブな印象を抱いたようだ。

仮名	年代	性別	出身地	居住地	その他	インタビュー方法
A 氏	20 代前半	女	モロッコ	Neudorf 地区	大学院生	非構造化インタビュー
B 氏	20 代前半	女	モロッコ	Koenigshoffen 地区	大学院生	グループ・インタビュー (C 氏と D 氏は途中で退室)
C 氏	10 代後半	女	モロッコ	地区不明	高校生	
D 氏	10 代後半	女	ストラスブール	地区不明	高校生	
E 氏	20 代前半	女	セネガル	Cronenbourg 地区	大学院生、初訪問	
F 氏	20 代前半	女	セネガル	Neudorf 地区	大学院生、初訪問	
G 氏	10 代後半	女	モロッコ	地区不明	大学生	メールでのアンケート
H 氏	70 代後半	女	ストラスブール	Robertsau 地区	学習補助ボランティア、非ムスリム	半構造化インタビュー

【図表 2】モスク利用に関するインタビュー協力者の属性　(※全員ストラスブール市内に居住)

③建設までの経緯

1975 年、A.E.I.F(Association des Étudiants Islamique de France : フランスのイスラム学生

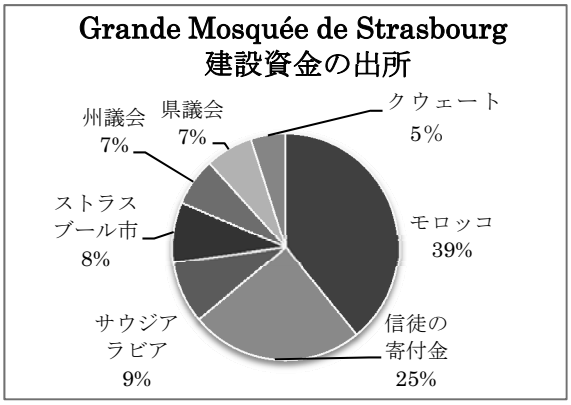
団体、現在は Grande Mosquée de Strasbourg に改名）のストラスブール支部が誕生する。これはモロッコ系のムスリムによる組織であった。現在、刑務所施設付きのイマームをしている Chaïb Choukri 氏（モロッコ出身、60 代）は、学業を終えたのちの 1975 年～1976 年からこの組織に参加し始めた。彼は「モスク建設のアイデアは、団体の誕生以来ずっと存在していた。……1975 年からすでに、私たちは小さなモスクを建設するために土地を探していた。」と語る。幸い 1982 年に利用可能な廃工場が見つかり、改装して礼拝に使用していたが、そのスペースも利用者数の増加とともに足りなくなり、特に金曜日は礼拝所に入りきらない人が外にあふれかえるようになった。旧礼拝所のそばのムスリム・ファッション店を経営する Durak 氏（トルコ出身、60 代）は、当時をこう振り返る。「金曜日は、ここは大パニックだった。たくさんの人がいて、たくさんの自動車があった。以前は、私たちはいつも屋外で礼拝をしたんだ。」

より広い場所に対する要求は高まり、1992 年、ついに当時のストラスブール市長 Catherine Trautmann が礼拝所を訪れ、その翌年にモスクの建設を決定する。特筆すべきは、1998 年に、ストラスブールのユダヤ教大長老、カトリック大司教、プロテスタント教会長の三氏が共同でモスク建築の後押しをする宣言を行ったことである。病院施設付きのイマームで、宗教間対話に積極的に関わる Mohamed Latahy 氏（モロッコ出身、50 代）は、以下のように証言する。「この計画はもちろんストラスブール市に支えられたけれど、それだけでなく、カトリック、プロテスタント、そしてユダヤ教の宗教共同体にも支えられた。私たちはすでに彼らとの宗教間対話の歴史を持っていた。だからこそ（モスクの建設計画が）より簡単だった。」そのような後押しもあり、2000 年、AEIF は市との長期賃貸借契約によって土地を得ることに成功した。さらに、同年に建設プロジェクトのコンクールが行われる。世界的に著名な 5 名の建築家によって各々のプロジェクトが紹介されたのち、12 人から構成される審査員団によって、イタリア人建築家である Paolo Portoghesi のプロジェクトが選ばれた。

2001 年には、市政が中道左派の PS（Parti Socialiste：社会党）から中道右派の UMP（Union pour un Mouvement Populaire：国民運動連合）へと変化し、建設計画は検討し直されることとなった。モスク建設の責任者であった Fouad Douai 氏（モロッコ出身、50 代）は 2001 年、市政が変わる 1 か月前に建設許可申請を提出したが、市政の変化によって建設計画は 18 か月間停止することになったという。また、新しい UMP の市長によって、当初計画されていたミナレット（尖塔）と図書館などの文化施設の建設を却下されることとなった。Douai 氏によると、「市長は、もしヴィジブルなイスラームの建物ができれば、人々が FN（Front National：国民戦線）に投票し、極右が台頭すると言っていた」という。また、自身もモスク建設に間接的に関わっていたというエクサンプロヴァンス大学の Franck Frégosi 教授は、ミナレットが忌避された理由として、「ミナレットは何か支配的なものをイメージさせる。すでに右派は巨大なムスリム向けの場所をつくることを受け入れがたく感じていたし、多くのフランス人にとっては、ミナレットは根を張り上昇するイスラームの象徴であり、権威を振るうイスラームのイメージだ」と指摘する。

ミナレットと文化施設を除いた形で計画は練り直され、2004 年に工事が開始する。しかし、2007 年、ドイツの建設業者との間でトラブルがあり、建設計画は再び停止することとなった。建設業者がフランスで丸天井をつくるための資格を有していなかったことと、最

初に予定していた金額では足りないと言いだしたことが原因であった。AEIF 側が一方的に契約を打ち切り、フランスの業者と新たに契約をすることで、2009 年から建設は再開された。2012 年 9 月に、ついにモスクの落成式が行われ、モスク管長 Said Alla 氏、モロッコの政府関係者、ストラスブール・ユダヤ大長老、CFCM 議長の Mohammed Moussaoui 氏、Roland Ries 市長（PS、2008 年に就任）、当時の内相 Manuel Valls 氏らが参加した。



【図表 3】モスクの建設資金出所

モスクの建設資金として、市・県議会・州議会から計 223 万 400€（建設資金全体の 23%）もの援助がなされた他、モロッコ、サウジアラビア、クウェートの政府からも多大な援助がなされている。

④ストラスブール・大モスクの影響

モスクの建築は何をもたらしたのか。まず何よりも、信徒にとっては大きな喜びであったはずだ。モスクの利用者 G 氏はこう語る。「完成した時、ついにモスクという名にふさわしいモスクができたことにほっとした。なぜなら以前はいくつかの地区で、残念な状態に置かれている何らかの建物しか見当たらなかった。つまり、昔は地下倉庫で、それをなんとか再整備したものだったから。あとは、驚嘆の気持ちです。本当になかなか実感がわかなかった。」モスク建設に最初から最後まで関わった Douai 氏も、喜びを以下のように表現する。「もちろん、ほっとしたよ。あなたにとっての修士論文みたいなもの、あるいは出産を終えた女性たちと同じ気持ち。」Choukri 氏は、「心が熱くなった、本当に嬉しかった。それ（モスクの完成）は、ストラスブール市にとって、ムスリムにとって、また非ムスリムにとっての偉大な祝祭で、勝利だった。なぜならこれはストラスブールのモスクだから。よそから来たのではなく、ストラスブールで生まれたモスクなんだ。」と語った。一方で彼は、モスクの建設はまだ途中にあることを言い添える。Latahy 氏も同様の指摘をする。「モスクの建設はまだ終わっていない。モスク自体は終わったけれども、ミナレットはまだないし、教室や展示室など、文化的な側面は何一つ終わっていない。」

では、外部に対するモスクの影響力はどのようなものだったか。モスクの持つポジティブな影響力として、Douai 氏はイスラームが社会の中で可視化される契機になると指摘する。「今、ムスリムはここにいる。つまりそれは可視的であるということ。見られるということは、認知されるということ。ムスリムはもう外国人ではない。」また、Choukri 氏いわく、「人びとはモスクを発見し、訪れるようになった。……このモスクには何千もの人が訪れる。彼らは訪問し、モスクを見て、イスラームやムスリムに対する見方を変える。」一方で、Frégosi 教授は別の影響力も指摘する。「一度モスクが建てられると、もちろんリスクがある、いくつかの界隈の組織が、『私たちも礼拝所が欲しい』と言いだす。……モスクの建設は、時には敵対関係や嫉妬深い反応に貢献することもある。」さらに、市内のムスリム団体だけではなく、アルザス地域圏内の他の都市における建設計画や、ヒンドゥー教や仏教など他の宗教団体による礼拝所建設の動向にも影響を及ぼす可能性が示唆された。

7. 考察

ストラスブール市内のフィールド調査からは、ストラスブール市には様々な形態の「イスラーム空間」が存在していることが明らかになった。多くは部屋の一室や旧倉庫を改装したような「界隈のモスク」であり、それぞれの特徴を持った礼拝所が多様なイスラーム団体によって運営されている。筆者が研究対象としたストラスブール・大モスクは、「中央のモスク」であり、ストラスブールにおいてイスラームが根付いていることを象徴する存在であるが、実際に利用者に話を聞くと、モスクを選ぶ理由として自分の生活圏内にあるということを重視する人は少なくない。街のシンボルとなるモスクの存在は重要だが、「界隈のモスク」や「近隣の礼拝所」もまた同様に、自由なイスラーム実践に大きな役割を果たしている。

また、ストラスブール・大モスクの建設に際して、他の宗教からの協力があったことは注目に値する。Latahy 氏の語りからも分かるように、以前から促進されてきた宗教間の対話が、この結果に繋がった。アルザス地方にはカトリック、プロテスタント、ユダヤ教の三宗教が併存してきた歴史があることからも、他地域よりも宗教的多元性が実現されやすい地域性を有している可能性が示唆される。一方で、市政の変化に伴い建設計画が変更されたり、モスクをどの団体が管理するかをめぐって一悶着があったりなど、コンフリクトも存在しており、建設までの道のりは決して楽なものではなかった。モスクをヴィジブルなものにしたくない UMP 市政、ミナレット／文化施設を備え、ストラスブールを代表するようなモスクを構想していた AEIF、モロッコ系団体のモスクをストラスブールのイスラームの代表として認めたくない他のいくつかのイスラーム団体など、諸アクターの各々の論理が衝突する場としても、モスク建設を捉えることができる。

最後に、完成したモスクは、ストラスブールにおけるイスラームのプレゼンスを可視化させ、ムスリムと他の居住者との出会いの場になっている。多くの観光客に訪れられ、メディアとは異なるイスラーム像を獲得する契機を提供している。建設に関わった方々の語りから示されるのは、モスクが市からの援助を受けて完成したことが、彼らにとってイスラームがストラスブールに根付き、ストラスブールで生まれていることを意味するということだ。ストラスブールという街にうまく組み込まれたモスクの存在は、人々のイスラーム観を変える可能性を存分に秘めている。

8. 今後の研究への展望

今回、ミュールーズやコルマールなど、アルザス地域の他の都市におけるモスク建設については全く調査ができなかったが、ストラスブールと同じく地方法の適用下にあるこの二つの街でも同様にモスク建設の動きがある。アルザス地方におけるイスラーム空間の在り方を明らかにするためには、ストラスブールだけでなく、他の街における事例を見ることが必要である。また、今回の調査で、1905 年法が適用されていないアルザスにおける政教関係がストラスブールのイスラーム空間の創出に繋がったことは明らかになったものの、一都市の特殊な事例のみから、フランス全体のイスラームと世俗主義の関係性を捉え直すのは困難である。フランスの他の地域や都市との比較が必須であり、これを今後の課題としたい。

9．主要参考文献

ジャン・ボベロ、三浦信孝ら訳『フランスにおける脱宗教性の歴史』白水社、2009 年。

小泉洋一『政教分離と宗教的自由―フランスのライシテ』法律文化社、1998 年。

Francis Messner, Pierre-Henri Prélot et Jean-Marie Woehrling, [2004] *Droit français des religions,* LexisNexis.

Bernard Godard et Sylvie Taussig, [2007] *Les musulmans en France*, HACHETTE.

Franck Frégosi, [2001] “Droit de cité de l’islam et politiques municipales: analyse comparée entre Strasbourg et Mulhouse,’’ Franck Frégosi and Jean-Paul Willaime (eds.), *La religieux dans la commune,* Labor et Fides, pp.92-137.

Karim Abdoun, Mathilde Chevre, Asma Al Atyaoui, Abdel Aziz Faïk [2004] *Histoires de mosquées -Recuil de témoignages-*, Kalima.

Grande Mosquée de Strasbourg ホームページ ＜ http://www.mosquee-strasbourg.com/ ＞